



生き物と生き物を相手にする人の 魅力を伝えたい ～生物系書籍の編集者として



塩坂比奈子

研究者を挫折、編集者を目指す

私は現在、地人書館という小さな出版社で自然科学書・理工学書の企画・編集をしている。大学では生物学を学び、植物生態学を専攻し、はじめ研究者を目指していたが、大学院修士課程の一年目に自分の能力のなさを痛感して挫折、でも何かしら生物の研究につながっていたくて、生物系の本の編集者という職業を考えたのだった。小さい頃から本が好きで、生き物そのものだけでなく生き物のことが書いてある本を読むのも好きだったということもある。また、自身は研究者になれないが、生き物の世界のおもしろさや生き物研究の楽しさの一端は知ったつもりになっていて、それを世の中に伝えることならできんじゃないか、という思いもあった。

しかし、出版社への就職活動を始めたものの、生物系の本を扱っている専門出版社は小さな会社が多く、新卒の定期採用をしていないことがわかった。マスコミ就職読本のようなものを読み漁ったり、出版社と付き合いがある先生のお話を聞いたりするうち、出版社の仕事の下請けをする編集（制作）プロダクションというものがあることを知り、まずそこに就職して、とにかくこの業界に潜り込み、編集者の仕事を覚えるのが先決と知った。

生物学に限らず、専門書を扱う出版社は東京に集中しているし、インターネットもない時代で地方の大学には情報がなかなか入ってこなかったが、先生、先輩、友人、その知り合いなど、心当たりすべてに話をし、少しでも関係ありそうな人にコンタクトするうち、第一プランニングセンターという農林水産業関連の刊行物やイベント制作プロダクションが見つかり、就職が決まった。

編集者は3K、気力と体力勝負

第一プランニングセンターに入社後、最初は、印刷所から出校した本やパンフレットなどのゲラを原稿と照合しながら、校正記号を覚えた。また、当時はまだ手書き原稿も多く、漢字の表記統一をしながらワープロ入力して印刷所への入稿データをつくる作業も多かった。パブルがはじける直前であり、マスコミ業界全体が元気で仕事も大忙し、新人の私も先輩にくっついて、昼間は撮影や取材、打ち合わせなど、夜会社に戻ってからがやっと

ゲラの校正や原稿読みなどの時間で毎日終電帰り、追い込み時期には会社に泊まってしまうことも多かった。まさに気力と体力勝負、肉体的にも精神的にもへとへとだったが、20代半ばと若かったからこそできたと思う。

この頃に担当していた制作物は、治山治水や林道、注目され始めた地球環境問題に関するものが多かったが、それまでほとんど知らなかった内容だけに、専門家の先生のお話を聞くことも、治山事業や林道工事の現場に行くことも新鮮で楽しかった。

原稿依頼の仕方で悩む

打ち合わせや取材はおもしろかったが、それらを通じて得た情報や知識から企画を立て、原稿依頼をすることが難しく、頭を抱えた。そして、これがうまくできるかどうかは編集者の仕事の最も重要な部分だと思うし、編集者になって20年近くになる今も常に悩んでいる。

かつて「編集者」というと、「サザエさん」のノリスケさんを思い浮かべる人が多い、と聞いたことがある。作家の伊佐坂先生のお話を取りにやってきて、原稿ができるまで隣の磯野家でお茶を飲み、おしゃべりしている、あのノリスケさんだ。今では電子メールでの原稿送付が当たり前だから、こんなイメージを抱く人は少ないかもしれないが、編集者とは「原稿を頼んで届くのを待っている人」と思っている人が多いのではないだろうか。

それは間違いではないが、私が原稿を依頼していたのは小説家やエッセイストなど文筆業の人ではなく、主に大学の先生など研究者や技術者、第一次産業従事者であった。忙しい本業の合間に執筆をお願いすることになるうえ、論文ではない一般向けの原稿となると、企画意図や執筆内容が明確でない「書きにくい」原稿は後回しにされてしまうし、原稿をいただけても意図からずれた内容だったりする。私はそれで何度も失敗し、著者にずいぶん迷惑をおかけし、先輩から注意された。

少しでも「いい」原稿をもらうためには、まず、誰が読んででもすぐさま企画意図がつかめるような企画書をつくるのが不可欠である。そして、できるだけ具体的に詳細な原稿依頼書を作成するとともに、著者と何度も事前打ち合わせをして（今ならメールでのやりとり）、著者が原稿イメージを膨らまし、書きやすくなるようなお膳

立てを整えることが何より大事とわかった。一見、著者にとって気楽で書きやすそうな「何でも自由にお書きください」というのが一番駄目なのだった。

数式に震えながら物理の本と格闘

第一プランニングセンターに勤めて3年、編集者として最低限の仕事が身につく頃だったが、そろそろ本来希望していた生物系の書籍の本をつくりたいという思いが強くなり、現在の地人書館に転職した。

地人書館は地学や天文書を中心に、理工学、医学薬学関係の学術専門書や実用書、自然科学書を出版している。私は「生物系」ということで採用されたが、小さな会社であるから、当然、それ以外の分野の本も担当する。読者対象もいろいろで、数式だらけの大学の物理学の教科書もあれば、中学生でも読めることを想定した縦書きの読み物もある。物理も数学も大の苦手な私にとっては、原稿に数式が出てくるたびに震え上がった。数式があらうとなかろうと、原稿を理解し（心の底からはできなくても）、誤植などの単純ミスに気づくことはもちろん、文章や全体構成のチェック、本文と数式や図表が正確に対応しているかなど最低限のことができれば編集者ではない。大学の頃の数学や物理の教科書を引っ張り出したり、その分野に詳しい編集者に助けてもらったりしながら、そしていつも「聞くは一時の恥」と疑問は隠さず著者に質問をして、何とか対応した。

このような調子で地人書館に勤めて最初の5～6年は、いろいろな本を担当した。大学文系向けの天文学の教科書、竹にまつわるエッセイ、薬剤師国家試験対策のテキストと問題集、その他さまざまな技術書や専門書など。分野も本の性格も体裁もいろいろで、仕事の進め方も気を配る箇所もそれぞれ異なって、新しい本を担当するたびに悩みが増えたが、この5～6年で大体どのような企画にも対応できるようになったと思う。

また最初のうちは、人脈もないし、なかなか自分で企画を立て、著者を見つけるということができなかったが、担当を任された本を1冊1冊つくって経験を積むうち、それらの本から新たな企画や著者が見つかるようになった。そして少しずつ、自分で企画立案から著者選定、執筆交渉ができるようになっていった。

マイナーな話題をメジャーにしたい

自分の企画の本は、「あ、この話、おもしろい（きっと売れる!）」とか、「この先生にこういうことを書いてもらえないだろうか?」というちょっとしたひらめきや勘を発展させていったものや、自分が知りたい、もっとよくわかりたいということに答えてくれる著者を捜して原稿を依頼し本になったものが多かった。自分があることに興味を持ち、資料を集めたり、多くの人に会ってお話

を聞いたり学会や講演会に出かけたりして本のテーマや概要を固めていき、著者を見つけ、著者と相談しながら、最終的に「本」という作品ができ上がる、この仕事の過程すべてが本当におもしろいし、やりがいを感じる。そしてこれが、編集者の醍醐味かもしれない。

また最近では、自分の得意分野であり情報を得やすい生物や環境に関するものでは、狭い業界や分野で「注目されつつある研究テーマ」や「問題視されていること」などに着目して、それを世間一般に伝えることを意図した本づくりを心がけている。環境などはだいぶメジャーになってきたが、その他理科系・自然科学系の話題はまだマイナー、そのマイナー分野の中から注目テーマを拾い出し、問題意識やブームを一般並みに引き上げたい、というちょっとした野望?もある。今考えると、外来種問題や人獣共通感染症に関する本では、それなりに意味ある本を刊行できたかな?と思っている。

著者の表情が行間から読み取れる本を

私は生き物のおもしろさを世の中に伝えたいと思って生物系の本の編集者という職業を選んだが、約20年の本づくりを通して少し考えが変わってきた。これまでに多くの研究者や技術者、第一次産業従事者など自然の中で働く人たちに会い、お話をうかがってきたが、皆さん自分の研究や仕事の内容、対象生物などについて本当に生き生きと語ってくれた。そのうち、研究のお話はもちろんおもしろいが、それ以上に、その生き物を研究したり、生き物相手に仕事をしたりしている人たちにより興味が湧き、その人となりにより目が向くようになった。そして、その人となりをうまく伝えることができれば、多くの読者の心に響くのではないかと考え、そのような意図で原稿をお願いした。

しかし残念ながら、講演会や個人的な面会でうかがうお話はおもしろくても、原稿（文章）になるとトーンダウンしてしまい、堅さが目立つことが多かった。たとえば、実験や事業の失敗談であるとか、研究者の日常生活であるとか、とても魅力的に思えたお話はたいい著者にとっては「どうでもいいこと」で、原稿では省かれてしまう。もちろんそれは原稿の本質ではないが、それがあることで読者を著者の文章に引き込み、本質部分に興味を持たせることができることもある。そのような時には、「先生、ここではぜひ、〇〇の話を書いてください」と注文をつけ、エピソードを追加してもらうようにしている。こういう勘はけっこう当たっていて、後で読者から「おもしろかった」という感想をもらうのは、新たに追加してもらった、言わば余談の箇所のことが多い。たとえ専門書であっても「著者のきらきらした笑顔や真剣な眼が行間から読み取れる原稿」を書いてもらうことが、今の私の目標である。これから、生き物や自然を相手

にしている人の魅力を引き出し、そこからまた見えてくる生き物や自然界の素晴らしさを伝えるような本づくりを目指したい。そして、その本を読んだ読者の中から、将来の研究者や自然の中で働く人たちが生まれたらいいな、そんな夢を抱いている。

これを書いている今、私は二度目の育児休暇中で、職場復帰を目前に控えている。編集者は3Kと書いたが、一般的に勤務時間が不規則で残業も多い。実際、私も子供がいない時は、ほとんど毎日残業をし、締め切り前には深夜まで仕事をしていた。しかし子供が生まれてからはそんな生活はもうできないし、子供の病気その他で休むことも多く、仕事の時間は約半分になった。

絶対時間が少ないわけだから、どうしても本の刊行ペースは落ちてしまうが、上司とも相談して、私はそれまでの仕事の仕方を見直し、何から何まで抱え込まず、外注できる仕事は外部スタッフに依頼するようにした。私は企画立案から原稿依頼、そして原稿完成までに力点を置き、さあ組版という段階になったら外部スタッフに任せる。最初から最後まで自分の手で好きなように料理できればそれはそれでおもしろいが、ひとりよがりになることも多い。いったん自分の手を離れた原稿は、次に戻ってきたとき客観的な目で見ることができるというメリットもあり、凡ミスや見落としていたことに気づくこ

ともあった。また組版後のゲラの校正も、漢字の表記統一や文章表現などのチェックはプロの校正者に任せ、自分は内容的なチェックを集中して行うようにした。

このように、外部スタッフの方々と仕事を連携させることで、限られた時間をうまく使い、できるだけ本の刊行ペースを落とさないように努力した。もちろん、職場の理解と協力があってこそ続けることができたわけで、たった8人の職場でありながら、また頻繁な欠席、遅刻早退にもかかわらず見守り支えてくれた上司、同僚には心から感謝している。

さて、子供が二人に増えて、しかも下の子はまだ1歳前で手がかかる。ますます使える時間は限られ、周囲にもますます迷惑をかけることになるだろう。まだどんな生活になるのか想像がつかないが、一人目の子供の経験を活かし、何とか乗り切っていこうと思っている。

また、二人の子供を育てている中で、疑問に思ったことや知りたいと思ったことを企画に活かさないのはもったいない。子供、そして子供を通じて得たお母さん友達や保育園等々、子供ができたことで広がった世界は編集者として貴重な体験だ。たとえば、子供の感染症や予防接種に関する本は今すぐにでも手をつけてみたい。子育てのさまざまな経験が新たな企画を生み出せたら、会社にも少しは恩返しできるだろう。